

ベトナム現代「大衆文学」の行方

川口健一

一九九八年五月にベトナム作家協会の文芸新聞「文芸」の創刊五〇周年記念祝賀会がハノイとホーチミン市の二都市で開催された。筆者は幸運にもハノイでの祝賀会に招待され、会場でその式典を直接に眺めることができた。詩人でベトナム作家協会副総書記のヒュー・ティン氏が最初に挨拶に立ち、「文芸」紙の五〇年の歩みを振り返った。この五〇年の歩みは、すなわち、ベトナム現代文学の今日までの歩みに他ならない。抗仏戦争、南北分断、抗米戦争（ベトナム戦争）と続いた長く厳しい試練のなかでベトナムの現代文学は形成されることになる。ヒュー・ティン氏は挨拶のなかで「文芸」紙編集纂に係った文学者たちのことを次のように語っている。

「文化の抗戦化、抗戦の文化化」という方針で、編集所の文学者たちは、決意をもって、新聞が人々の声を直接に伝え、戦闘のなかにある一民族全体の息吹と体力を伝えることができるように徹底的挺身を行いました。ほとんど編集所全体が従軍した時もありました。何号かの新聞は戦役の最中につくられました。その方式がすでに「文芸」紙の伝統となっています。（文芸）紙十九号一九九八年五月九日」

ヒュー・ティン氏の言葉は文学者たちの挺身的貢献と「文芸」紙が苦難の現代史において果たした役割を強調した。招待された文学者、ジャーナリストたちの精神の高揚感が会場に満ちるなか、他の来賓の祝辞が続き、国家からの一等独立勲章の贈呈が記念式典の最後を飾った。

ベトナム現代文学は一九四三年にベトミン（ベトナム独立同盟の略称、今日のベトナム共産党の前身）によって提示された「ベトナム文化綱領」において方向が定められた。そこでは、文学を含むベトナム文化の性格が「民族・科学・大衆」として規定されることになった。しかし、この当時においては、ベトミンによる文化活動はハノイ、サイゴン（今日のホーチミン市）など都市部においてはほとんど影響力をもたず、活動そのものも片々たるものであり、また「ベトナム文化綱領」そのものもベトミン独自の考案というよりも借り物的な性格を示していた⁽¹⁾。この「大衆」という漢語はベトナム語にも漢語語彙として入っているが、話し言葉においても、また書き言葉においても用いられることはほとんどなく、普通は「群衆」というベトナム漢語が大衆の意味で用いられる。このようなことも、「ベト

ナム文化綱領」の借り物的な性格を物語っている。「民族・科学・大衆」というこの三原則は、文学を中心とする文芸の分野においては一九六〇年以降「民族・現実・人民」という漢語術語に改められて提示されるようになる⁽²⁾。つまり、「大衆」とは「人民」のことなのである。では、人民とは誰をさすのか。抗仏戦下、ホー・チ・ミンは文芸家と人民について次のように述べている。

文化芸術もまたひとつの戦線です。

みなさんはその戦線における戦士なのです。

他の戦士と同様に、芸術戦士は一定の任務、すなわち、抗戦に奉仕し、祖国に奉仕し、人民、第一には工、農、兵に奉仕するという任務をもっています。⁽³⁾

人民とは主に、労働者、農民、兵士を意味するということである。これ以外の、例えば、知識人はどうか。一九五〇年代末に公表された「革命道徳」のなかでホー・チ・ミンは、「知識人は、次第に肉体労働者になり、知識人と労働者の区別は徐々に解消するであろう」⁽⁴⁾と述べている。北ベトナムの社会主義建設と南北国家統一が眼前の最重要課題として浮上していた当時においては、この見方に不自然さはなかったであろう。知識人は労働者のなかに解消する存在として捉えられていた。

抗仏戦期を経て、特に、南北分断期（一九五四―一九七五）の北ベトナム（ベトナム民主共和国）において、「人民のための文芸」がホー・チ・ミン初め、チュオン・チン、トー・ヒュー（詩人）たち党指導部によって繰り返し、呼号される⁽⁵⁾。「人民のための文学」はそのような「文芸」のひとつとしてある。「人民文

学」は特殊ではあるが、指向するところは大衆文学に違いないのであるから、ここでは「大衆文学」⁽⁶⁾としてこれを捉え、以下に続けるの。

II

一九五四年七月のジュネーヴ協定によりベトナムは北緯十七度線を暫定軍事境界線として南北に分割される。共産主義の封じ込めを目的とするアメリカ合衆国のベトナム南北分割恒久化、南ベトナム（ベトナム共和国）に対する軍事経済援助強化等の動き、また北ベトナムに対するソ連（旧）、中国などの共産圏による軍事経済援助などの外的要因、これに国家統一などの内的要因がからみ、ベトナムは南部における局地戦争からアメリカの爆撃機による北爆へとベトナム戦争がエスカレートする。ここでは、ベトナム戦争についてはこれ以上述べない。このような時代状況のなかで、北ベトナムにおいては、必然的に政治とより緊密な関係に立ち至らざるを得ない「大衆文学」のあり様について考えてみたいと思う。一九五〇年代後半には北ベトナムでは、文芸の自由化を求める「人文―佳品」グループに対して党が強権的に抑圧するという事件の発生や、ベトナム作家協会の設立（一九五七年）など、文学に限ってみても人民のための「大衆文学」の強化がより切実に叫ばれる。このひとつの高まりが一九六〇年の『獄中日記』の出現となる。

『獄中日記』は今日でもベトナム革命文学のバイブルとして「人民」に教育的道徳的な影響を及ぼし、また現代ベトナム文芸批評家や文学研究者の絶えざる考察の対象となっているホー・チ・ミンの漢詩集である。これはホー・チ・ミンが一九四二年

に中国蒋介石軍に捕らえられ、広西省のさまざまな監獄を連れ回された一年余りの間に書かれた漢詩集⁽⁸⁾との見方が今日までのベトナムにおける定説である。ホー・チ・ミンの『獄中日記』は書かれてから十七年後の一九六〇年になって初めて現代クオック・グー訳による紹介がなされ、「一大事件」として出現したのである。「文学研究」一九六〇年五号は「文学生活における一大事件 ホー主席の『獄中日記』」と題する記事の中で次のような作品紹介を行っている。

『獄中日記』は、半世紀以上共產主義の理想のため、祖国のため、人類のために途切れることなく奮闘した偉大な共產主義者の詩集である。蒋介石の残忍で腐敗した制度下での牢獄生活に関するきわめて現実的な諸篇の詩から、鷹揚たる態度、度量のある気迫、鉄石の意志、何物も揺るがすことのできない革命的樂觀的精神がにじみ出る。

『獄中日記』は計り知れない価値をもつ歴史的文献であるばかりか、今日のわれわれすべてにとって革命的道德と品格の高い教育的作用を有する一大文学作品でもある。

一九六〇年という年はベトナム現代史において重要な節目に当たっていた。まず何よりも、一八九〇年生れのホー・チ・ミン生誕七〇年の慶祝の年であること。また、ベトナム共産党(当時は労働党)創立三〇周年、ベトナム民主共和国設立十五周年、これらに呼応して一九六〇年十二月には南ベトナム民族解放戦線が成立すること、等々。これ以降、『獄中日記』は人民のための「新しい文芸」の模範として、労働者、農民、兵士を精神的に鼓舞す

る役割を果たすことになる。

文学者、芸術家は労働者、農民、兵士をよりよく理解し、現実を作品に反映させることが重要視され、そのために生産現場や農村に入ったり、従軍したりすることが政策としてより強化されるのもこの時期以降のことである。これはホー・チ・ミンの教えをより組織的に実現するための文芸政策の徹底化の試みに他ならなかった。

誰のために書くのか？

大多数の工・農・兵のために書くのです。

何のために書くのか？

教育し、説明し、鼓舞し、批評するためにです。大衆に奉仕するためにです。⁽⁹⁾

『獄中日記』は一九六〇年の出現以降、着実に人民に浸透していったことが類推できる⁽¹⁰⁾。『獄中日記』はこうして「大衆文学」の見本として高い評価を獲得したのであるが、作品の内容についての検討は別の機会に譲ることにしたい。

一九六五年から始まる北爆期のハノイにおいては、文芸家たちには戦争をテーマとした創作に関心を集中させることになる。「愛国主義」、「英雄主義」、「人道主義」が作品の主要テーマとなることは、自然な帰結であると言う他ない。これが一九七五年まで続くのであるが、さらにはその後のカンボジア問題、中越国境紛争などの軍事的政治的緊張の続くベトナムでは、基本的にはこのテーマに沿って創作が続けられることになる。

III

一九八六年十二月にドイモイ（刷新）政策が開始されて以来、すでに十三年余りが過ぎた。文学の面から眺めると、この十三年は一九九一年を境にふたつの時期に分けられる。一九八六―九一年までと一九九二年―現在となる。前半を「呼応期」、後半を「模索期」と取りあえず呼んでおくことにする。ベトナム文学の現在、作家たちが創作の方法をめぐって、つまり「大衆文学」を超える「新しい文学」を求めて「模索」の段階にあると筆者は見ている。このふたつの時期に渡るドイモイ現代文学の流れは次のように跡付けられる。

一九八七年一〇月にグエン・ヴァン・リン書記長（当時）は文学者や画家、音楽家、写真家、建築家など一〇〇名ほどの文芸家たちと文学芸術をめぐる対話集会をもった。二日間に行われたこの話し合いは十五時間にも及び、「創作の自由」や「文学と政治」などのさまざまな問題について率直な意見が文芸家たちから提起され、書記長はひたすら耳を傾けたという。そして、会の最後に書記長は五〇分ほど自分の見解を述べた。彼は「文学芸術の成果はまだ貧しい」との評価を下し、「自分が正しい」と思い、建設的意識を持っているならば、堅く真理を守り、勇敢であらねばならない」と集まった文芸家たちを励ました。社会主義の枠内という条件つきながら、「党はくびきを解かなければならない」とも語っている⁽¹⁾。この「歴史的できごと」の後、ベトナム文芸界のドイモイが開始される。文学に限っても、従来ベトナム現代文学のエッセンスとされた「愛国主義」、「英雄主義」、「人道主義」の三つの主義に異議を唱える作品が書かれるようになったのである。グエン・ワイ・ティエップ（一九五〇年生まれ）、ズオン・

トゥ・フオン（一九四七年生まれ）、バオ・ニン（一九五二年生まれ）などがその代表的作家である。特に、女性作家ズオン・トゥ・フオンの体制批判的な小説は党政府当局を苛立たせるところとなり、一九九一年四月、ついに彼女は逮捕される。七ヶ月間ほど拘禁されたその罪名は「国家機密漏洩」とのことであつた。

一九九一年は現代ドイモイ文学の収獲の年となつた。一九九七年七月に邦訳が出され、一時話題になつたバオ・ニンの『戦争の悲しみ』を初め、他に二名の作家の長篇小説がそれぞれベトナム作家協会賞を受賞した。

『戦争の悲しみ』はドイモイ文学の成果という以上に、ベトナム現代文学がこれまで生み出せないでいた「文学」そのものの具現であると筆者は思っている。純文学とも言い得るこの小説には「愛国主義」も「英雄主義」も「人道主義」もない。だれの心にも響く普遍としての「文学」があるのである。ベトナム作家協会はこの作品によくも賞を与えたものだと思う。一九九七年九月に日本ペンクラブの派遣で、作家の森詠、関川夏央の両氏と筆者の三名がベトナム作家協会を訪問する機会があつた。その際、関川氏がベトナム作家協会渉外係の副係長を務める詩人のファム・ティエン・ズアット氏に「この小説は社会主義リアリズムの創作方法に反するのではないですか」とたずねると、ズアット氏は「方法にこだわらず、小説の内容がよければ評価します」と答えた。現代ベトナム文学はようやくここまでできたのである。

さらに、この年にはズオン・トゥ・フオンの五作目の長篇小説が発表されたが、ベトナムにおいてではなく、アメリカにお

いてであった。体制批判をさらに色濃くした『無題小説』というこの小説もドイ・モイ文学の成果にちがいない。

以上の状況が「呼应期」である。そしてその後が現在に至る「模索期」となる。このことを典型的に示す証拠は、長篇小説の不在である。一九九二年以降話題作が生み出されないまま今日まできているのである。取りあえず、ふたつの原因が考えられよう。ひとつは、一九九一年のソ連崩壊に伴う文芸創作理論「社会主義リアリズム」の失墜である。従来のベトナム現代文学は中国社会主義文学とともに、旧ソ連型社会主義文学をもひとつの手本としてきたのであった。もうひとつは、『戦争の悲しみ』の出現であると思う。作家たちはこの作品をどう乗り越えるか、そのための創作方法を模索しているのが現在に至る状況である⁽¹²⁾。

IV

ベトナム現代文学の課題は、文学が政治からいかにして離れ、文学本来の表現の可能性を追求することができるかにある。しかし、この課題はベトナムの現在の政治・社会状況から考えて解決はほぼ不可能である。この課題が解決できない限り、ベトナムの現代「大衆文学」はいつまでもローカルであり続ける他ない。つまり、一般の読者を引き込み、読者との間に精神的な緊張関係をつくり出すことはあり得ないのである。一九九〇年代後半のベトナム現代文学を眺めていて、筆者はこのように思いに囚われる。依然、文学は政治に束縛されたままである。

現在のベトナム作家協会執行部は一九九五年三月に行われたベトナム作家協会第五回大会で選出された五名のメンバーで構成されている。この大会において、ドー・ムオイ書記長は文学者を前に

次のような発言をしている。

ドイ・モイの時期に入り、党は作家が想像力を発揮するようによりよい条件をつくる努力をした。最近の創作は生活のあらゆる面、あらゆる問題に言及している。同時に、筆者たちは文学が政治から分離しないということもはっきりと理解している。文学芸術における創作の自由は、人民に奉仕し、祖国に貢献し、すべての人が奮闘して前進し、国土を美しく繁栄させ、だれもが物質的にまた精神的に豊かな生活を送ることに貢献するよう鼓舞する自由なのである。

(「文芸」紙一九九五年三月十八日)

ベトナム作家協会は、一九九六年十一月末に「第八回党大会議決を貫徹し、展開する会議」を開催したが、この際にもドー・ムオイ書記長は文学者を前に演説を行っている。

またこの年には「ホーチミン賞」が創設され、同年一〇月末に第一回の授与式が大統領府で行われ、物故者も含め、総勢七十七名の文学者、文化人が表彰された。この文化功労賞は、作家、詩人、劇作家、批評家、研究者、音楽家、画家、写真家、舞踊家、建築家など文化全域を対象とした賞である。文学者では、グエン・ホン（一九一八—八二）、ハイ・チエウ（一九〇八—五四）、ダン・タイ・マイ（一九〇二—八四）、ヴー・ゴック・ファン（一九〇七—八七）、カオ・ワイ・ディン（一九二七—七五）などが受賞している。これらの作家、批評家はいずれも物故者である。この賞は毎年与えられる賞でなく、次回がいつになるか、現在のところ不明である。

ホーチミン賞の創設は、一九四五年以降、特に一九五四年以降に共産党指導の下、今日までつくられてきた「社会主義文化」を守るための権威付けをねらったものであることは明らかである。次回授与は不明であるが、この賞が文学者、文化人にとり偉大な意義をもつ賞として映る限り、ベトナムの「社会主義文化」は今後とも生きながらえていくことは確かである。

最後につけ加えておきたいことは、ベトナムの文学者たちが世界の文学者と交流する機会が今後確実に増えると思われるが、それに伴い、バオ・ニンのような醒めた見方のできる作家が出てくるにちがいないということである。

デンマーク外務省の招待で、ベトナム作家協会の副総書記ヒュー・ティン氏をはじめ、ファム・ティエン・ズアット氏、ゴ・ヴァン・フー氏、バオ・ニン氏の四名が一九九七年六月にコペンハーゲンを訪問し、デンマークの文学者たちと交流した。バオ・ニンはこのときの感想を「文芸」紙に寄せているが、そのなかで彼はベトナム現代文学について次のように書いている。

ベトナムの作家たちと他の民族の作家たちとの交流をさらに広げる必要性ととも、ベトナム文学を外国に紹介することの切実性を意識すればするほど、筆者たちの側にある立ち遅れに對し、さらに懸念を覚え、苛立ちを禁じ得ない。しかし、ベトナム文学がすみやかに世界の文壇に名を出すかどうかは、わが国における今日の文学創作の文章の価値と奥行きによって決定されるのであり、このことは作家協会がどう努力しても、作家たちに代わって行うことはできない。(バオ・ニン「繁栄と平易のデンマークを訪れる」、『文芸』三二号、一九九七年八月二日)

ベトナム作家協会は現在、六二〇名余りの会員を抱えている。副総書記ヒュー・ティン氏によると、ベトナム全体では文筆に携わっている人は四〇〇〇名ほどいるとのことである。作家協会の現在の長である総書記グエン・コア・ディエム氏(五七歳)と副総書記ヒュー・ティン氏(五八歳)は共に抗米戦争(ベトナム戦争)世代に属する。二人共まだ五〇代で文学者としてはむしろ今後の活躍に期待を寄せることもできる。と同時に、彼らに続く若い戦後世代をどのように育てていくのか、不安も覚えるのが筆者の正直な感想である。一九九七年九月に筆者はホーチミン市でファン・チエウ・ハイ氏や女性作家チャム・フォンさんら南部の若手作家に会う機会があった。彼らののびのびとした屈託のない表情に筆者は今後のベトナム現代文学の新しい流れを意識させられた。ベトナム文学界では戦後世代に当たる第四世代が力を蓄えつつある。彼らがグエン・コア・ディエム氏やヒュー・ティン氏らの第三世代を新しい感性と表現手段で乗り越えていく日、ベトナム現代「大衆文学」が終焉し新たな現代文学として蘇生する日―が遠からず訪れることに筆者は期待を寄せたいと考えている。

注

(1) 事実関係は未確認であるが、毛沢東の「文芸講話」(講演一九四二年、文章での発表一九四三年)からアイディアを得ているように思われる。「文芸講話」のなかには、民族・科学・大衆という表現は見られないが、次のような一節

